

# ソーシャル・ダイナミクスにおける 価値意識の適応的機能

- カール・ポパーの構想とニュー・サイエンス・パラダイムの  
方法論にもとづく試論 -

指導教授: 谷嶋 喬四郎

国際学研究科 国際関係専攻

ゼラエヴァ・マリーナ

この論文では、世界の進化に関わる現代の哲学的・科学的思想を分析することによって、社会における文化および道德観の変動の原因を明らかにすることを目的とする。

第一章では、いま最も注目されている科学的複雑性理論とポパーの批判的合理主義哲学とを比較する。両者を比較することによって、世界についての理解と、また科学的知の発達についての方法論とにおける主要な問題に関して、両者に一致する見解があることが示される。現代の科学革命は、オープンシステム探究に対する関心の高まりに始まっている。自然界のすべてのシステムにオープンシステムが見られるが、このオープンシステムの研究は、既存の世界観についてのパラダイム変換、という問題をわれわれに投げかけた。このオープンシステムとは自己組織能力をもつことが発見されたのだが、自己組織系メカニズムの研究は、生命現象のうちにある多くの謎を解明することになるであろう。

複雑性理論とは、不均衡な状況下におけるシステムの予見不可能なふるまいによって条件づけられるシステムの進化の非決定論的なあり方を強く主張する。非決定論は、ポパーの哲学によってもまた支持される考え方である。彼が問題とするのは、科学的知識の発展とそれが自然的世界の理解におよぼす影響の予見不可能性であり、いいかえれば自然的世界でおこる複合的な状況のすべてを理解することは不可能である、ということである。非決定論は、ポパーの哲学でキー・コンセプトの役割を演じるものにほかならない。彼は、非決定論の概念をもとに、彼の倫理的および歴史的な概念である「批判へと開かれた態度」と

ともに、社会の歴史には、いかなるあらかじめ定められた意味・観念もないという彼の考えを作り上げる。ポパーのこのような考え方は、社会的歴史の方向づけにおける個人主義と合理主義を支持するものである。

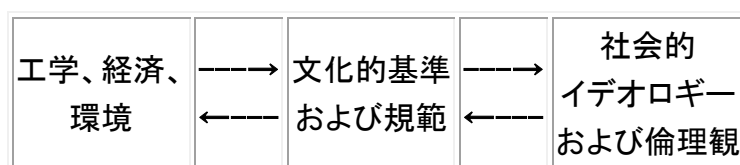
複雑性理論は、ダーウィンの進化論をさらに発展させた理論である。この理論では、ダーウィンの自然淘汰理論に、自己組織化という原理が新しく加えられた。ポパーもまた、ダーウィンの理論を再考し、生命システム内部の諸部分の進化においてそれらの部分の能動的関与が働いていると考えた。彼のいう「内発的淘汰」という考えは、「外発的淘汰」から自然に加えられた自己組織作用の考えに対応し、実質的に等しい主張である。

進化の過程が、「変型化」「同型化」「淘汰」「補強と反復」の四つのフェーズをたどることは現在では広く認められている。そこで第二章では、社会学についてのポパーの考え方にみられる不整合についての私の考えを述べた。ポパーの理論にある不整合は、1) 歴史主義批判と進化論についての彼の見解の不整合——歴史主義批判は、普遍的法則の不在を主張し、一方、進化論についての彼の見解は、私の見るところではそれ自身普遍的法則として提出されている。2) ピースミール社会工学と合理性原理（ゼロ方法）の間の不整合——前者は能動的理性的個人を前提し、他方後者はむしろ大勢順応主義者の前提の上に成り立つ。これらの問題にみられる不整合の原因を、私は、ポパーが社会的進化のプロセスにおける諸フェーズとそれらの状況下における差異を考慮に入れていなかったという事実にあると考える。

第三章では、ナザレティヤンが提示した社会価値システムの進化についての見方を述べる。社会道徳における変化の研究のための彼の方法論は、ニュー・サイエンス・パラダイムに基づくものである。彼は、道徳的発達とは、すなわち社会的、環境的システムのなかで、複雑性および不安定性が増大したとき、それを補償するための不可欠な進化にほかならない、と述べている。この社会的進化についてのナザレティヤンの見方を分析することによって、私は、ゼロ方法とピースミール社会工学というポパーの考えを、社会的進化の異なる時期・段階を説明するための方法論であるとする理解にたどりついた。

複雑性理論の方法論を手がかりとして、私は、社会的価値システム変化のモデル構築のためにミクロな諸状態の視点から分類を試みた。ミクロな諸状態とは、個人の行動を通して実現される文化的、道徳的基準および規範にほかならない。一方、社会的システムのなかにあるマクロな構造は、社会的倫理として確立され、社会的制度のなかで具象化されている。こうして、社会的価値は、①個人的な行動にみられるミクロレベルと、②社会的制度のなかに見えるマクロレベルとの、二つのレベルに分けて考えられることになる。社会的価値システムのなかでおこる価値観の変化は、物質的世界から切り離して考えることは

できない。私は、社会的進化のフェーズに対応して、個々人の社会的・倫理的思考が能動から受動へと変化していく状態をあらわすような、道徳的規範と倫理的基準の変化のメカニズムの図式を示してみた。この図式は、①社会の物質的条件、②個人的意識、そして ③進化のプロセスのなかで形づくられる社会構造 の間の相互作用を示している。



この図式は、複雑性理論とポパーの三つの世界モデルのどちらもが、進化を説明するために共通して提示するフィードバック効果の論理を示すものである。

この図式の妥当性を検討するために、第四章で私はソローキンの西洋文明史を通してみられるさまざまな文化パターンの体系化についての研究をとりあげる。ニュー・サイエンス・パラダイムの方法論を基礎として歴史を見る近代の歴史家と社会学者たちによる歴史的な解釈と、さらにポパーの閉じた社会と開かれた社会についての考察を比較することによって、私は、個人の合理的・理性的活動は減少と増大のフェーズをもつことを示した。

次に示す表は、ナザレティヤン、ソローキン、ポパーの社会的進化についての見解を比較分析した結果をまとめたものである。この表によって、社会史のなかのさまざまな時期に、三者が類似した特徴を見出していることがわかる。すべての時期が、批判的意識のレベルといった観念によって分類されているといってもよいであろう。ナザレティヤンは、批判的意識は生態学のおよび経済学的危機の時代に高くなる、という。自由な個人はさまざまに異なった思想・観念をもたらす能力をもつ——それこそが進化をもたらす変化の要件にほかならない、というわけである。ソローキンは、人々を絶対主義的ドグマから解放するような危機の時代において、理想主義的価値観の増大が見られることを示す。ポパーもまた、そうした時期に、確立された規範の批判的再考に対して人々の意識が開かれた態度をとるという。試みと論駁、そしてピースミールな手直しが新しい構造を作り出す。一度、進化的方向性をもつ構造的機能のパターンが選択され、人々の行動様式に強い影響を与えれば、人々の行動は、新たに獲得された構造的組織化の論理によって条件づけられるのである。ポパーとナザレティヤンは、こうした構造的再組織化のプロセスと、さらにまた、それが進化的で自然な選択プロセスとして、システムを構成する要因に与える影響について、一致した見解を分かち持っている。一方、ソローキンは、構造的再組織

化のプロセスは、人間世界の物質的な領域には関係しないと考えて、別の説明を与える。自然的な選択の時期とは、線的な関数・機能によって多かれ少なかれ予測可能な形で記述される直線的発展の時期にほかならない、とされるのである。この自発的な組織化のプロセスは、人々に、世界のすべてを導く自然法則について考えさせ、歴史の意味の方向と目的を発見させ、自然法に従って社会を計画的につくる試みをさせる。こうした試みをポパーは、「歴史主義的でユートピア的」と呼び、そして「歴史主義的なイデオロギーが広くいきわたっている社会を「閉じた社会」と呼んでいる。ソローキンは、社会的・文化的ダイナミクスにおける直線的発展の段階を、感性的(sensual)な時代として特徴づけている。広い範囲に影響する直線的発展の形をとる経済的活動の物質的な影響が、別の危機をもたらすことは避けられない。ソローキンが部族的社会の時代と述べ、また、ナザレティヤンが進化における危機への時代と記述する同じ時代を、ポパーは「観念化の時代」として特徴づける。ソローキンの分類における、個人的な自由を抑圧する観念的価値観の発現、いいかえれば部族的メンタリティの発現を最も的確に説明できるのは、ナザレティヤンの「我々 - よそ者」マトリックスの分析だろう。私は、観念化の時代あるいは部族的メンタリティの時代を、経済的危機の増大、貧困、不安定さの結果、「我々(us)をよそ者(others)」との違いを際立たせることによって精神的統合をはかる企てとして説明したい。しかしながら、危機を乗り越える真の機会、開かれた精神と個人的自由、さらに「共通の価値システムを共有」することという、観念化とは別のもうひとつの原理のもとでの統合によってのみ得られるのである。社会進化のなかでのこの統合は、ナザレティヤンの用語でいえば分岐点のフェーズにおいて、ソローキンの用語では理想主義の時代において、さらにポパーの用語では開かれた社会において生ずるということになる。

ポパー、ナザレティヤン、ソローキンについての私の比較研究を表の形にまとめると次のようになる。

#### 時代区分

ナザレティヤン (ニュー・サイエンス・ パラダイム)	社会的環境的危機	分岐点	誘因 直線的時代)
ソローキン	観念化	理想主義的	感性的
ポパー	部族的社会: 秘教主義	文明化を促す力: 開かれた社会	閉じた社会: ヒストリシズム

	ナショナリズム ファシズム 異端狩り イデオロギー	(人道主義 理性主義 個人主義	集団主義 自然主義
--	------------------------------------	-----------------------	--------------

この表に示されたそれぞれのフェーズは、社会環境的なシステム全体の状況によって条件づけられる。安定が大きく崩れたときには、個人主義が発現する。これは重大な危機を乗り越えようとするための必須の批判的要因である。なぜならば、自由な個人は、根本的な問題解決に向けて、創造的な潜在能力をもつからである。安定した状態においては、個人はむしろ社会的組織のパターンに従う。

ナザレティヤンの著作は、道徳的進化の過程に対して独創的な説明を与える。道徳的進化における協調を説明するために、ナザレティヤンがサイバネティクスから借りて適用した階層的補償の法則によって、私の図式はより完全なものになる。共通の道徳的システムのもとでの協調は、技術的・経済的發展によってもたらされる人間関係の多様性の増大に対してバランスをとる補償となる。道徳的統合は、社会進化のひとつの部分フェーズである。したがって、道徳的・倫理的システムの変化は、進化のプロセスの四つのフェーズ、すなわち「変異」「協調」「淘汰」「強化と再統合」のフェーズをたどって行われる。以上のような社会生活についての考え方によって、現代社会でおきているさまざまな現象の意味が明らかになる。社会の状況を見定めることは、人々のあれこれの社会のおよび政治的行動の重さと結果を測るための助けとなる。

現代世界の状況は、しばしば、生態学的、政治的、経済的、道徳的、文化的といったさまざまな局面での危機といわれている。我々は、イデオロギー的抑圧と世界を支配する二大権力の調停しがたい対立の後におとずれた局面に生きている。我々の時代は、規範が崩壊し、社会的関係を結ぶための新しい態度を求めている時代である。現代思想の分析結果と良識は、文化的多様性と道徳的統合なしに、世界の社会はこの危機を乗り越えることはできないということを示している。この事実を理解することは、若者たちのために適切な社会的・政治的な方向づけをするために役立つであろう。